

友人からのプレッシャーはどのように教育投資に影響を与えるのか？

Leonardo Bursztyn and Robert Jensen (2015) "How Does Peer Pressure Affect Educational Investment?"
Quarterly Journal of Economics 130 (3): 1329-1367.

東京大学特任研究員 矢ヶ崎 将之

はじめに

中学や高校のとき、クラスメートの目を気にして授業中に質問をすることを諦めてしまった経験を持つ人は少なくないのではないだろうか。よくよく考えてみると経済学的には不可思議な現象である。伝統的な教育経済学のモデルに従えば、生徒は与えられた教育機会を最大限活用し、生涯賃金を最大化するように行動するはずだからだ。分からないことをそのまま放置してせっかくの学ぶ機会を逃すはずがない。しかし、自分の過去の経験に立ち返ってみると、この問題の背後に伝統的な経済学が必ずしも考慮してこなかった生徒の重要なモチベーションの存在に気づく。クラスメートからの人気だ。社会学では、学校で人気者になることや友人に嫌われたくないといった社会的承認欲求が、生涯賃金を最大化する経済学的モチベーションに負けず劣らず重要な行動の規定要因であると考えられてきた (Coleman 1961)。では、生徒は本当にクラスメートからの人気を気にして将来のために有用な教育投資の機会を逸してしまうことがあるのだろうか。もし生徒がクラスメートからの人気を気にして教育投資を決定しているならば、クラスメートに行動が観察されている状況においては生徒が内的に最適と考える行動から乖離する行動が観察されるはずだ。本稿で紹介する Bursztyn and Jensen (2015) は、上記の仮説に基づき、ランダム化フィールド実験を用いることにより、学校の中で人気者になりたいといった社会的承認欲求が、生徒の教育投資に与える影響を検証している。

実験内容

本研究の実験は、2013年12月から2014年4月にかけて、ロサンゼルス南部の4つの公立高校で実施された。これらの高校に属する生徒は周辺学区域と比べて家計所得が低く、その多くがマイノリティーであるヒ

スパニック系米国人であった。この実験では、高校二年生の生徒を対象にSAT (大学進学適性試験) のオンライン対策講座が無料でオファーされた。具体的には、対象となったクラスにリサーチ・アシスタントが訪問し、短い説明をした後、講座の申し込み用紙を配布した。生徒は申し込み用紙に記載されている内容を確認し、受講を希望する場合は署名することを求められた。ここで、署名する申し込み用紙は、公開条件と非公開条件の二つのパターンが用意されており、クラス内でランダムに配布された。公開条件においては、生徒が講座の受講を希望したかどうかを同じ教室にいるクラスメートに公開することが記されていた。非公開条件においては、生徒の受講情報は同じ教室にいるクラスメートを含む誰にも知らされないことが記されていた。仮に生徒が受講に伴うクラスメートからの印象を気にしている場合、公開条件と非公開条件では講座の受講率に何らかの差が生じている可能性がある。さらに、クラスメートに観察されているという事実それだけでなく、もし「誰に」観察されているかが重要であれば、教育投資を促すクラス編成方法に重要な示唆を提供しうる。本研究では、この「誰に」の効果を識別するために、non-honors class と honors class¹⁾の二つの異なる学力レベルのクラスにおいて、本人の意思決定が公開されることの効果が異なるかどうかを検証した。

結果

まず non-honors class と honors class における非公開条件のもとでの受講率はそれぞれ72%と92%であった。honors class の受講率の方が高い理由は、non-honors class に比べてより向学意欲の高い生徒が集まっているからであると解釈できる。それでは受講の意思決定が公開される公開条件では受講率はどうかただだろうか。結果は、公開条件における non-honors class の受講率は61%と、非公開条件よりも

約 11 %ポイント統計的に有意に低かった。一方で、honors class の受講率は 93 % と、非公開条件と比較して統計的に有意な差は観察されなかった。この結果は、勉強に積極的であることを示すことは non-honors class の生徒にはネガティブな印象を与えるので、non-honors class では印象が悪くなることを回避して生徒が受講を取りやめた可能性が考えられる。

しかしこれは単に non-honors class と honors class の生徒の異質性を反映した結果かもしれない、「誰に」行動が観察されているかが影響しているとは必ずしも言えない。この問題に対して、本研究では以下のようなアイデアでこの懸念に対応している。第一に、実験は生徒に事前通告なく行われたため、実験のタイミングは生徒側から見れば外生的であったことに着目した。第二に、honors class を一週間のうちに 2 コマ受講しているような生徒の集団に着目した。この集団に属する生徒は、もちろん科目の興味などにバラツキはあるかもしれないが、懸念されている向学意欲などの観点ではほぼ同質に近い集団であると考えることができる。したがって、事前に通告されることなく実験が行われたタイミングで、honors class を 2 コマ受講しているような生徒が、non-honors class か honors class のどちらで実験に参加したかは、本質的に外生的なトリートメントと考えることができる。もしこのような集団に限定して、意思決定を公開することの効果は異なれば、それは「誰に」行動が観察されているかに依存して生徒が敏感に行動を変えていると考えることができる。

上記のような生徒集団に限定してみると、non-honors class と honors class での非公開条件での受講率はそれぞれ 79% と 72% であった。この差は有意ではなく、したがって両者はほぼ同質な集団であると考えられる。さらに、公開条件のもとでは非公開条件と比べて、non-honors class では 54 % と受講率が有意に減った一方、honors class では 97 % と受講率が有意に増えた。これは、生徒は自らの行動を観察しているクラスメートの空気を敏感に察知し、それぞれのクラスで印象を悪くしないように受講の意思決定を行っていることを示している。non-honors class では勉強に積極的になることが周囲にネガティブな印象を与える

ため受講を回避するが、honors class では勉強に積極的になることがポジティブな印象を与えるため受講に積極的になったという解釈と整合的だ。

実際、本研究ではこれらの結果がクラスメートに「人気者になりたい」といった、社会的承認欲求によってもたらされているかどうかを、主観質問を用いて検証した。生徒が、クラスメートの中で人気者になることがどれだけ大事かを質問し、これまでの結果がそのような欲求の強い生徒にのみ観察されることを示している。

おわりに

本研究では、従来のモデルでは簡略化のため必ずしも考慮されてこなかった生徒が学校で「人気者になりたい」や「嫌われたくない」といった社会的承認欲求が有益な教育投資の意思決定に大きな影響を与えることを示した。こういった生徒の学校内での社会的承認欲求が、伝統的な生涯賃金最大化行動とどのようにインタラクトするのは、今後より詳細な検証が必要なトピックである。本研究においては SAT 対策講座に着目したが、例えば生涯賃金に大きな影響を与えることが示されている文系・理系のキャリア選択などより生徒の人生を大きく左右する意思決定に社会的承認欲求がどう作用するかは検証できていない。今後、社会学や心理学など他の学問分野の知見も統合し、中学生や高校生が学校環境の中で直面しているインセンティブやその帰結に関するさらなる理解が進むことが期待される。

- 1) non-honors class は普通クラス、honors class は上級クラスである。

参考文献

Coleman, James (1961) *The Adolescent Society: The Social Life of the Teenager and Its Impact on Education*. Glencoe, Illinois: Free Press.

やがさき・まさゆき 東京大学特任研究員。最近の主な論文に“Competitiveness, Risk Attitudes, and the Gender Gap in Math Achievement,” *RIETI Discussion Paper Series 18-E-066* (joint with Makiko Nakamuro)。労働経済学、行動経済学専攻。